



ロータリー精神の探究

東京RC 長瀬 富郎

このメモを書くのは、私がロータリーをよく理解しているとの自信を持っているからではない。むしろ理解していないから書くのである。書くことによつてロータリーを探究し、此正を受けたいと願うのである。

アンジの聖フランシスは日頃「理解されることよりも理解することを」と祈つたそうであるが、私も理解せんがために、誤解されることをも覚悟で筆をとる。

ロータリーの理念はそのリーフレットを3分間讀めば中學生でもすぐ理解出来るであろう。だが、その妙味は永年味えば味うほど「曰く、云いがたし」ということになる。

これはロータリーが單なる觀念の産物でなく、いのちを持つ「生きもの」である證據だ。

例會日になるとどうも出席しないと気持ちが悪い。出席するのは、出席率のためでもない、講演や食事や歌に魅力がある譯でもない。一種の習慣というより外ないであろう。しかしこの習慣は風呂ぎらいの不潔漢に入浴の習慣がついたようなもので大いに有難い。

カトリック信者がミサを受けることに大きな喜びを感じるのは、彼等にあらかじめの準備があるからである。ロータリアンが例會を楽しむにも、まず心の準備がなければならぬ。その準備を怠つてはロータリーの例會の妙味はわからない。

われわれは職務柄、平素鬼の假面をかぶらされている。仕事の鬼なのである。ロータリーの會合に出る時には、この鬼の假面をまず入口で帽子とともにクロークに預けねばならない。心のうちに、どんなに暗いこと、辛いことがあつても、微笑をもつて會場にのぞむ。これが秘訣である。われはほえめば、かげもえむ。

かくて例會の1時間は魂のなぐさめとなり、友情は次の1週間へのはげましとなるのだ。

鍔をきて風呂に入つて来ては風呂の有難さはわからない。

——ロータリーは單なる晝めし會ではない。奉仕の理想を實現する手段として集つて晝めしを食べるのである。——それにちがいない。ところが世間の人から見ると、奉仕の理想を實現したいのなら、晝めしばかり食べ

て居ないで、もつと積極的に能率的にやつたらどうだといいたくなるらしい。

しかし、ロータリーの眞髓はそれが俱樂部であつて、社會運動でも道徳團體でもないところにあるのだ。これを理解することこそ眞にロータリーが何ものであるかを知る要點だと思ふ。

即ち、ロータリーの特性は、如何なる場合でも、その理想をロータリアン1人1人の人格を通じてのみ實現しようとしていることである。

ロータリーにとつては、その理想を性急に能率的に實現するということよりも、よきロータリアンをつくるということこそ最も重要な問題なのだ。

もしロータリーが、奉仕の理想を能率的に社會に實現しようとするならば、1年ごとに役員・理事・委員等を改選するなどいうことは損なことである。しかしこの制度を、よきロータリアンを多数ぞでよう、という目的から見直す時、はじめてそれが如何に當を得たものであるかがわかるのである。

——ロータリーの精神をもつと社會一般に宣傳してはどうか——こんなことを考えたこともある。しかしロータリーの奉仕の精神を言葉で宣傳しても、少しも世人には魅力がない。昔からどこの國でもいいふるされたことだからだ。奉仕の精神は、ロータリアンの人格を通じて實際に具現されてこそ、はじめて輝きを持つのだ。

職業奉仕は勿論、社會奉仕も國際奉仕も、ロータリーの場合は、心から心へ、ということが重んじられる。それ故、社會奉仕の如きも極めて地味に、その対象を全國的なものを選ばず、その俱樂部の屬する郷土にえらぶ。

「廣く浅くということよりも狭く深く。そうしてロータリアン自身が、金ばかりでなく、時間をさいて奉仕する。そこにロータリー獨特の行き方があるのではなからうか(私の屬す東京RCの如きは、餘りに日本の代表的俱樂部、國際的俱樂部という點に心をうばわれすぎ、自分の屬する千代田區中央區の市民に對する奉仕を怠つてゐるのではないかと反省させられる。)

戰爭中に日本のロータリーが軍の壓力で解散させられたとき、これを心から悲しんだのはロータリアンだけで、社會一般の民衆は何の關心もよせなかつた。

これが假りにアメリカで行われたとしたら、どうであ

らう。社會全體がさわぎたてたであらう。

これを見ても、日本のロータリーが、まだまだ根の浅いことがわかる。この町から、この職域から、ロータリーが無くなつたら、どんなに淋しく心細いだろう。社會一般がそういう感情を抱いてくれるところまで、私たちはもつともつと親切のこもつた奉仕を示さねばならない。

ロータリーは政治や宗教の問題にふれぬことを不文律にしているそうであるが、これはまことに賢明である。これは宗教問題や政治問題を逃避しているのではない。ロータリーの奉仕の精神がそれ等の問題よりも、より本質的であり、普遍的であることを自覺しているからである。

イギリスの保守黨と労働黨との政策に大差がなくなつて來ているように、世界の犬勢は右も左も一つの方向に流れつつある。それは大衆の生活安定ということである。

問題は、その後にある。

ヨーロッパ諸國のうちで最も生活水準の高いスイスとスウェーデンの、過去數年間總人口に對する自殺者の割合が他の諸國よりもはるかに高いそうである。イギリスも社會保障が行きとどくにつれて、自殺者の數が急増しつつあるときく。

學者達は、その原因は生活安定による倦怠だといつている。物質生活の安定の後にこそ、眞の人間らしい生きがいがあるべきなのに倦怠と自殺が待つてゐるとは驚くべきことである。

現代人は、眞の人間の生き方を忘れてゐるのだ。即ち奉仕の喜び、奉仕の生きがい、ということを経験してゐないのだ。

奉仕の精神。それこそ20世紀後半に來たるべき人間復権の鍵である。

さて、問題を現實にもどして、ロータリアンとしての私のなすべきことは、

1. 會合への出席をはげみロータリーの空氣を満喫すること。
2. 奉仕の實行によりその喜びと生きがいを體驗すること。
3. ロータリーの精神、ロータリーの組織についての研究を怠らぬこと。